

終戦後30年の日本の姿と展望

三 宅 恭 一

はじめに

生きていたい。と同時に、より豊富な内容を以て、益々幸福に生きて行き度いと、強烈に欲求することは、高等な動物一般に共通な、而も根本的な事実である。然も此の欲求満足の為に一切の生活活動が営まれるのであって、吾々人類も亦決してこの例に洩れない。而して吾々は此の生存慾と、それに基く生活々動の現実的諸形態を以て人類研究の出発点となし、それ以上遡って思弁的に措定された一切の非実証的な観念を排除する。

現実の人間生活は相互的社会関係の中に於いてのみ成り立つものである。従って、一方に於ては単に自然に対して機械的に営まれるやうな活動でも、それは一般の自然現象とは異って、その反面には必ず或る社会関係を形造り、一定の社会的意味を有ってゐる。従って吾々は、人間の生活を他の自然現象、或は動物生活と区別し、真にその実相に徹した原理を把握する為には、何よりも先づ社会関係の本質を究明しなければならない。それでこそ吾々は人間生活——歴史現象の現実を正しく解釈説明し得るのである。此の点ではかの観念論者のやうに現世的な要素を輕視して雲の上高く持上げては漠とした思弁の原理を独断したり、或は自然科学的実証論者のやうに全然社会関係から抽象された個人を前提として、これを自然物と同じやうに考えて抽象的に法則づけたりするのは違ふ。

人間は根柢に於て具体的な生活をなすものである限り、その生活内容の一切は必ず一定の社会関係を持ち、その社会の特質によって制約されるものである。

る。つまり吾々は自分の生存する社会の特相に応じて、一定の生活を営み、一定の理想を持つものであって、周囲の状況とは無関係に絶対主観的な自由生活をなし得るものではない。従って吾々は具体的な社会を離れ現実の制度を度外視した一般的な立場のみから人間の歴史生活を研究したり、思想を議論することは無意味であり、更に不可能ですらある。只茲に注意することは人間生活がその社会的関聯に依って制約されるといってもそれは全然自由な意志の発動、主観的に見た意志の自発性又は自律性即ち自我の主動的な権威を無視するものではないということである。只その自我が何を考え如何なる内容に形成されるかはその置かれた具体的社会状況と照応してのみははっきり理解し得ると言うに過ぎない。

更に進んで具体的な社会は必ず一定の歴史的段階として現れる。勿論吾々は歴史に於ける永遠性即ち縦に一貫する民族的特性というやうなものを否定するものではないが、然しその具体的表現である社会の組織とこれに伴う人類生活の諸内容は、終始一貫した不変のものではなくて、一定の契機に依り、一定の過程を辿りながら次々の進展と変化を続けて行くものである。さうして形造られた一つの歴史段階を吾々は「時代」と呼ぶ。此の時代は単に暦年代の機械的な区分ではなくて、特定の組織形態を以て現はれた社会発展の一段階を意味する。それでその内容に於ては或時代は他の時代と判然と区別される特徴を有っている。

以上、人間生活は必ず一定の社会的制約を受けることから或客観的共通特色を有つものであり、またその社会は必ず一定の時代特色を有って現れるものである限り、人間生活の内容それ自身も時代的特色を帯びていなければならないことも容易に断定し得る。そこで吾々は現実の人間生活の基準とその方向をはっきり見出し得ることになる。

即ち歴史の流れの過程に於て具体的な時代相を以て、現実形に形造られた形態の特異性を把握理解し、此の歴史性と社会性の結合点に立って確立された原理こそ真に吾々の生活を指導し得る権威を持ち得るのである。

従って教育を論ずるものはこの歴史的社会的現実に立って確たる具体的な人

間像を描き出さなければならない。

私は人類の歴史、教育の発展を、一般の例に従って、次の様に時代と共にその社会圏は拡大すると考へる。

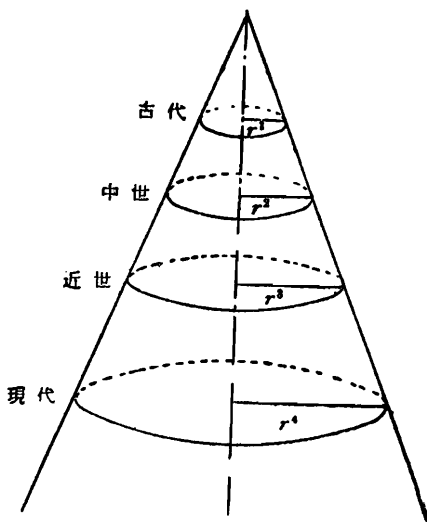
古代の奈良平安時代は貴族社会で、公卿、僧侶の階級が、民族文化の創造者であり、吾が世の春を謳歌した。従って社会圏の半径 r^1 は極く小さい。

次の中世は所謂封建時代で、鎌倉、室町から織豊、徳川の武士階級の時代で、社会負担の人間の数は増大する。

第3の近世は文芸復興以後で明治維新が中心になり所謂市民社会は半径 r^3 が可成り大きくなった。平民階級農工商の裡でも、有閑、有知、有産の所

謂資本家階級が社会を支配する。万民平等というも例を選挙権に取れば、民族開放の歴史がわかる。最初、憲法発布と同時に制定せられた選挙法に依れば、有権者は、直接国税15円以上を満1年亦所得税を満3年以上継続納入した者、約46万人あったが大部分が地主階級だった。次に1900年有権者の資格は直接国税10円以上所得税2年以上継続納付と改まり、有権者の数は約3倍になった。又1919年には資格を直接国税3円以上に引下げたので、数は334万と2倍余に増えた。普通選挙が1925年に採用されたが、25才以上という制限があつて、有権者は、1,300万となる。婦人参政権は戦後である。これが参政権を通しての日本民主化の過程である。

かくて第4の現代に入っているが、今日では無産勤労大衆が、一人残らず「主権者」国民である。国家の負担者なのである。民族の責任者、憲法の制定権者、自律人格者である。だから現代の教育はこの新しい主権者、人格の形成である。



第一終戦直後の日本

先般さる女流作家は「皇太子は今度、自らの御意志によってお妃様をえらばれた。戦後、天皇も神から人間へと歩み進まれて、民主主義は日本の地盤に根をおろしたかに見えたけれど、13年たってその民主主義の根が本当に日本の中に定着したということをしみじみ感じさせるのが今度の御婚約の発表である。」といとも簡単に、日本国民の今日の感慨を洩している。

然しこゝで吾々はその13年前の、根のない民主主義の花を、荒れ果てた日本の国土に、移し置かれた頃を、想い浮べて見よう。

1946年11月3日には日本国憲法の公布を見た。当日筆者は師範学校長の講話について記念講演を命ぜられた。たまたま当時、映画館では「格子なき牢獄」が上映されていた。

私の趣旨は当時の現実を直視して、日本の国は「格子なき牢獄」であり、国民は「一億皆乞食」であると断じ、この国を天国にするのも、地獄にするのも将又この国民を流浪の民にするのも、長者の先祖にするのも、吾々の覚悟次第である。

人口10何万の街に日の丸の旗1本立ってなく、お赤飯を炊くでなく、紅白の餅を食べるでなく、口では目出度いといいながら全く気の毒極らない式日である。誰もが戦前の乞食よりひどい住居に住み、食事を摂り、衣服を纏っている。然し、いつの時代でも100万長者の先祖は乞食より甚い生活をした、つまり真黒になって働いた者が多いといはれる、吾々が今乞食の姿をしているということは恥ずるに足らない。恥しいのは今「この乞食、長者の先祖なり」という確信に燃えるか否かということである。一億の乞食が皆長者の先祖たり得るには民族無限の信仰に培う教育がなければならない、この教育、この確信、この覚悟がなければこの民主憲法は文字通り、模倣であり借り着であらうが、今日吾々の覚悟次第で今から30年先き、諸君の子供の時代即ち皇太孫時代には真の独立と、民主政治が輝き真の平和国家には絢爛たる文化の華が咲き香うことは火をみるより明らかである。そのときこそこの民定憲法が真に吾々の憲法となる。30年先きに滅びる民主の華は今より無きに均しい。30年先き、諸君の子

供の時代を待望して一步步新しい民主的な生活の仕方を身につけなければならないというにある。そして演壇の下では生徒諸君は映画を頭に描いてるが、勅任の校長先生は慌てた。この目出度い日に牢獄とは何事だ。進駐軍に聞えたら——ということで、私は講演をやめさせられはしなかったが、自分では職を退くことを覚悟していた。

(註一九四七年元旦のマッカーサー元帥の教書に依れば日本国民は一人残らず捕虜であり四方海を以て閉ぢ込めてあるから食わせる責任があるとあったので私は自分から辞めない覚悟をした)

憲法草案は1946年3月7日の新聞に発表されたが、タイム誌にも新憲法草案の記事が載った。そしてその見出しには *we, the mimics* とあったのは今も忘れられない、これは日本憲法草案前文の書出しの文句「日本国民は…」(*We, the Japanese People*) とあったのが、彼のアメリカ合衆国憲法の前文の書出しの文句 *We, the people of the U.S.* そのまゝなので皮肉ったのである。

1947年正月には労働攻勢が斗争手段として、2・1ストの準備を進めた、ことは忘れられない。

そこで終戦後は吾々は「現代は全くの *Darkest Age* である」といていた。

それどころか、世界的 *Armageddon* を招来するのではないかと怖れられたどこの国でも、特に仏、伊の国内問題が大きくゆらいだ、がそれよりも歐洲は真二つに分れていて、北は *Baltic Sea* の *Stettine* から、南は *Adriatic Sea* の *Trieste* に到る南縦断の一線に「鉄のカーテン」とチャーチル氏の言う米英の「黄金のカーテン」が引かれ、誰でもが所謂 *Cold War* が今に *Hot War* にならなければよいかと祈ったものである。

誠に国の内も外も、全くの暗黒時代であった。駅には毎朝毎晩何10台のトラックに満載されてゆく進駐軍労務者の群、街には戦災放浪児の群、汽車も電車も、長い列をつくってそれでも乗れば上乘。あっちに白ん坊、こっちに黒ん坊が産れる。かくては新憲法の主人公、新しい主権者達は、曾て明治天皇が詠まれた如く「行末は如何になるかと曉の、ねざめねざめに世を思う哉」、亦「國の為失せにし人を思う哉、暮れゆく秋の空を眺めて」と文字通り五里霧中であ

った。

その頃である。或日10時頃私の出勤の電車の中で、流石に終点近くは空いていて偶々ギターを持った2人連れの学生が挨拶する。「どうした」ときけば私の授業（教育史）に出るのだという。昨夜は浮浪児達と旧軍隊の厩舎のコンクリートの上に藁をひいて、毛布を引張り合って寝たという。子供達にせがまれるまゝに、ギターを鳴し、おはなしをしてやったという、然もこれは一晩や二晩ではなくずうっと続いているらしい。この10分位の歩き話で、恥しい話であるが教育史の教師が何とも知れず、五体がずーんとしびれる思いがして、「君等こそ生きた昭和のペスタロッチである。僕の授業にはもう出なくてもいいよ」と別れたが、私の教室である階段教室の一番高いところでは二人がニコニコ顔をならべて講義をきいていたのは勿論である。

ところが卒業判定の会議でよくきけば、この二人は、出席が悪いというので問題になった。然し一面二人が家から貰う小遣は勿論弁当迄浮浪児に与えている事実が誰からか話し出された。そんなことゝは本人達は知りもせず、県の係に色々交渉して東山の景勝の地にある成徳学院に、「少年の丘」を建設して、自分達で畳、建具等の車の後押しをしたり、少年達を連れて、この新しい施設に収容したりしていたのである。県の役人達や大人達のいうことなど、何一つきかない戦災浮浪児達を、見事収容し、指導したものは、実にこの平気な学生達であった、然もこの昭和のペスタロッチ達の仕事は立派に実を結んだ。

吾々は、遠い、歴史上のペスタロッチを究めるのは難しいが、斯うした目の前のペスタロッチを不良扱いしたり、ときには自分の裡なるペスタロッチに全然気が附かないでいることも往々ある。

そしてこれは戦前戦後を問はず教育を学ぶ者の態度である。私は終戦後、皆が右往左往した思想書ブームの時代には特にこの感を深くした。そして自分の裡に拠り所を持たぬ程不幸は無い。

1946年3月30日には東京に於て、教育使節団報告書が聯合國最高司令官に提出された。結論に於て「他国民が一国民をその軍閥から解放してやることは出来ようが、結局は国民自らがこれを解放しなければならない。（どの国民も自

らの力で自由にならなければならない)。亦「日本人に民主化の可能性があること、また彼等の健全な文化を再建する能力を信じなかったならば吾々は此国に來なかったであらう」。「吾々は如何なる民族も如何なる国民も、その民族や国民の文化的資源から、自らの為にも将又全世界の為にも何かしらよいものを創造する力のあることを信じている」「吾々自身の制度を如何に表面的に模倣してもそれは有難いとは思はない」ともいっている。そして「民主主義に於ては個々の人間は卓絶した価値を持つのである。……少数集団と雖も尊敬され尊重されなければならない。」「教育制度は理解力あり、責任感あり、且よく協力する社会の一員としての各個人の能力を、全的に発達させることを奨励するように組織さるべきである。」

敗戦後の聯合国の対日教育政策が、軍国主義、超国家主義体制の除去という形で進められた。

やがて憲法が制定され、その憲法の崇高な精神は、1947年の教育基本法の中に盛られ「この理想の実現は、根本に於て教育の力にまつべきものである。」「ここに、日本国憲法の精神に則り、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立するため、この法律を制定する。」という。

これと同時に学校教育法の公布があり、4月からは6.3制実施となり、対日占領政策は教育の場合教育調査団の報告書の線に沿って、着々実施された。

吾々は模倣であらうと、強制であらうと、吾々の裡なる琴線にちかに大きく響くものが二三ある。曰く平和=戦争放棄或は協力する社会。曰く独立=自治「この乞食長者の先祖なり」。新文化国家建設には隠忍自重と奮闘的精神の美德が要請されるが、その根基となるものにこの民族の独立と協力が尊い。この時であるかの内村鑑三氏の言、

More than gold,
More than honour
More than knowledge,
More than life,
O thou Independence!

魂の独立、経済の独立こそ、新しい民主憲法の主人公たる資格である。うつかりすると、憲法が発布されたら日本は独立したかの如き錯覚に陥る、1949年に評論家山浦貫一氏は、「新憲法は独立してから」といっている。それは時の吉田内閣は270名の絶対多数を誇り乍ら、ドッジ公使に公約を全面的に否定されてしまったことを「二百七十の悲劇」とうたっている。「だからこの先きといえども日本語で書いた独自の政策なぞというものは少しも期待出来ない、なぜ公約が実行出来ぬか、私は敢て民自党を非難しようとはしない、ただ彼等が被占領国であるという厳然たる事実を選挙に酔って忘れていた点を責めるに止める」「ドッジ公使の念ずるところは日本経済が自立してアメリカの手足まといにならぬことだ」「……大日本政治会が拍手機関として存在した、軍国時代には国民の自由はなかった。敗戦国民にはたとえ270名を選んでも自由意志は許されぬ、新憲法には基本的人権をうたっているが、これは独立国になってからの設計図であって、被占領国では高嶺の花にすぎない。」「改めてわれわれが敗戦国民であることをはっきり知る場所が第五国会」「どうせ修正は出来ない予算案」といっている。

また「日本人には被治者根性がある」とか、マ元帥が日本人を12才の少年にたとえたことも有名である。

「自分のうちによりどころを持たぬ不幸な国民」「自分の幸福は自分が作る」ことを考えない。1951年頃の長谷川町子女史の「さざえさん」(朝日)に四つの絵画

(1)に誘いに来た方はモーニング、誘はれた方は羽織に袴

(2)どちらも忘れものをしたから一寸待って呉れ

(3)和服の代りに妻君にモーニングを出させる

(4)門のところでモーニングは羽織と袴になってる二人共頭に？

これは実にうまい表現だと思う。

国家の独立も、民族の自律も、一代や二代では完成されない。社会の進歩はその国の下部大衆の教育に由る。これが歐洲民主国の信念であるという。知識の詰込でなく、人間をつくる教育である。1949年の毎日に、英国下部大衆の誇

りとして闇相場のないことを挙げている。又英国国民の耐乏生活について、「道義心が経済の秩序維持の根柢となって大きく横はっていたと思はれる。英国の持っている最大の財産は、ニューカッスルの石炭でもなければ、カライド河の造船業でもなく、実に英国人の持っているそれ自身であると思う」と述べている。

ところが「日本人はどんなよい法律でも破ることばかり考えている」といわれるのとは全く対蹠的である、これは知識の多少や富の大小の問題ではなく、態度の問題である。信仰の有無である。

当時は敗戦国の心理と、後進国の心理とが吾々の内部に折り重って、民族の誇りを失い、国家を怠忘したといえればそれ迄だが、日本の歴史上最も暗黒な時代と云へよう。

第二、終戦後10年の日本（現代＝皇太子時代）

平和国家、文化国家の曙光が見られる、

第1、Nobel Prises 獲得、国際文化憲章の線迄文化が向上する。

第2、10年後には UNESCO を日本で開きたい。

1947年頃迄のノーベル賞受賞者の数のビッグファイブは独、米、英、仏、瑞典の順であった。

瑞典の歴史は中世紀末迄は軍事国家であった。1638年に始まった30年戦争や北欧戦争等でも主役であった。

砂丘の国、丁抹も当時迄にノーベル賞を7人受賞していた。然し、100年前には墮落、腐敗、無恥、野蕃で亡国の一步手前迄ゆく。熱烈な詩人、神学博士ニコライグルンドキ氏の教育革命と復員軍人ダルカス工兵大佐の土地改良とによって、我九州大の小国であり乍ら世界の一等文化国になった。

瑞西も8人ノーベル受賞者があった、瑞西も数世紀に亘って歐洲第一と言はれる勇強な傭兵供給国であって好戦国民として定評があった、それが文化国家平和国家として永世中立国となった。

次に世界の50余ヶ国の国会議員から成る、万国議員同盟では1924年以来引続

き「代議政治の危機」を調査研究し続けているが、各国の議員の中で、其の国の議会制度に満足している旨を言明した者は、唯僅かに、瑞西と瑞典の二ヶ国のみで、その他の国々は皆何れも一様に議会の権威失墜と不信用とを訴へないものは無かったとの事である。

誠に平和愛好国民は文化国家を建設する。文化国家のみが民主政治への信頼と確立とをもたらす。

幸にして湯川博士のノーベル賞受賞は一般人には晴天の霹靂であったが、全く戦後の新日本の黎明を告げるものゝやうに輝しい限りであった。

次に終戦後、TVA（民主主義は進展する）の建設10年の記録による総合開発が、陰に陽に、凡ゆる総合開発に大きな示唆を与えたことである。米国のやうに極めて資源の豊富な国ですら如何にしてこれを国民の福祉に役立たせようかと不断的努力が加えられている。計画性の必要を心の底から望むものは、資源に乏しい、四つの小さな島に住む日本なのである。

どこにダムをつくっても、耕地がつぶれ、人家が埋没する。荒れている河は間もなく、貯水池を埋没して終う、それだけ高い計画性が必要である。

家族計画の普及も福島県の常盤炭鉱では1952年から実施して、面白い推計がある。

亦商店経営の上で東京都内十条銀座商店街では1952年から、商品の仕入れ、装飾、宣伝、販売に商店街が一つの店舗となって協力している。

1959年には実業界で武藤絲治氏は「秩序計画」を提言している。「事実はいずれの民主主義国においても、共同の利益のために私益が自由意志によって規制されている社会を持っていることは間違いない。」「日本のように政府が力によって規制しようとするのとは全く反対に民間が自由意志によって規制するのである。」「政府の統制なり干渉なりをできるだけ排撃して各自が、社会的責任を負うてゆく自由社会が、今日の西欧の社会、自由陣營の社会、また歴史的な社会であると思う」

全く狭い領土と乏しい資源と、多い人口を持つ国は益々計画と統制を必要とする。

戦後、農村から、馬や牛を飼いながら、ハエ撲滅の努力をしたり、蚊蚤の完全駆除をしている部落が各地に出来、県下でも南郡石川町森川部落は、1951年頃から有名である。

最近三戸郡名川町マル五防除組合ではリンゴ農薬散布用の牽引車付大型機械スピードスプレーヤー（国産）を252万円で買い、25ヘクタールの防除をするという。而もリンゴの共同防除は既に各地で盛んに行はれている。吾々は東北農村の協力の型をこゝに見出す。

吾々がこゝまで来て考えることは、戦後最初の10年の模倣時代は、愛知大の高桑教授の言はれるやうに、「わが社会は手さぐりではうように歩むよりほかなかった。がそれにもかゝらず、腹ばいの最中にも民主化への大勢は不動であった。」これも「日本民主化のテキストが国民自らの手によらず、外から持ち込まれたという悲しい事実の中にあった。」からだと思う。

それもこれも日本民族の胸のどこかに民族無限の信仰の光をもやしていた証左に他ならない。今日進んだ科学と、優れた技術に支えられた高度の文明は、社会秩序の信仰とでもいうべき叡智の光に導かれて始めて、社会の進化、人類の発展に貢献することが出来る。かのTVAの構想は正しくこれを物語る。TVAの事業は決して単なる経済的な産業開発や総合開発ではなく、社会の凡ゆる機能の総合化と、高度に専門化された技能の総合化、にもとづいた社会計画である。この計画、共同の構想の方がどれ一つの専門分野の成果よりも広範囲であることが直ぐ分るので、専門化された技術者の間の偏狭な競り合いは解消されて終う。必要なのは個々の技術の成功ではなくて全体の成功なのである。そこには協力する社会はあるが、斗争はない。

今日程社会秩序の信仰、民族無限の信仰によって導かれた、社会計画、総合判断を希求される時代はない。

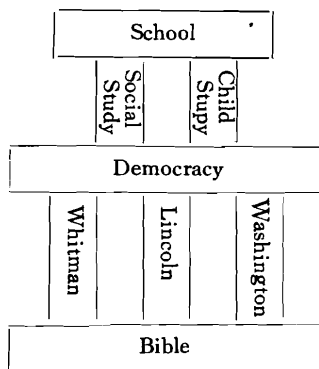
例へば米国民民主教育の基底にはバイブルがあるといわれる、簡単に図示すれば、（次頁参照）

だからよく米国人は、金がない、財産がない、学問がないといはれるより、信仰がないということが一番恥じ入るといはれる。誠に信仰は世界の最高所である。

そこから無限に、高く、美しい創造の忍耐、
苦勞が生れる。新しい社会改造が出来上る。

教育が今程此社会改造の人間の形成を要請
されることはない。然もこの教育は新しい日
本の社会の主人公たる、民主国家の主權者た
る、無産勤勞大衆の一人々々に、国家負担の
精神と、人類奉仕の理想とを腹の底から、湧
き起させることである。間違つても「吾れを
救え」と国家に泣きつく人間の養成ではない。

国を造り、人間を救うものは特別の、選ばれた、少数の人々ではない、有知無
知を問はず、有産無産を問はず次の自覺と信仰に生けしめたいものである。



世界改造の原理は、

自己境地の開拓にある。

自己境地開拓の原理は

生活の根本的改革である。

生活の根本的改革は、

その生活の一切を挙げて、

人類の為に奉仕するのである。

須らく、先ず自らを改宗して

自らを救う自らの開祖となれ。

それ人自らが宗教である。

人自らが哲学と神学の具現である。

また

神といひ、仏というも

そは決して、

現実以外に

そを決して

自己以外に

求めてはならぬ。

今こそ、新しい社会の主人公、民主政治の主権者たちは奮起すべきである。日本の現実、人口過剰、資源の貧弱、食糧の不足、失業、社会不安を直視すべきである。日本の負うこの困難な問題は 8,000 万の日本民族一人残らず背負っている。誰も代って背負っては呉れない。日本人は自分で、命がけで解決すべき義務がある。疲弊困ばいの立直り切れない日本の国民を前にして大義名分もなく、次から次へ斗争を繰返すとなれば、社会公共の福祉に反することになる。何よりも各人が社会に対して持つ責任を自覚し、これを実行して行く。そして少しでも社会をよくして行くことに協力して行くべきである。

でなければ往々にして、国民ではあっても単なる国土の住民であったり、人類であっても単なる個人主義の存在であったり、人間であっても単なる唯物主義の動物であったりする。

そこで真の自己を発見し、真の国民を発見し、真の人類を発見し真の個人を発見した時が所謂第二の誕生である。そしてそこに新しい教育がある。所謂 life-centered school であるが、「生命」の教育とでもいうべきか。ライフは「いのち」である。自ら正しいと信ずることは死力を尽して実行する実践理性。毒杯をおほぐ、水火も辞さない勇気を持つことである。然もこの教育は今まで学校の益々社会化し、亦社会を一層学校化することにより、輝かしい皇太孫時代を迎える。

第三、終戦後30年の日本（皇太孫時代）

そこではどんな人間も、働くことを楽しみとし、働けば食える世界である。新しい教育組織と医療設備とが整い、人々は健康と聡明に輝き、争いも無ければ、嫉妬も無い。人々お互に信じ合う、明るい協力する社会で、学校は新生日本の典型の縮図を現出する。従って一度足を、森の都、文化の都の学都に入れると、人情も、風俗も変り、昔の聖地巡礼の如く、その腸を金石にする。何故ならば、学都は、社会秩序の信仰に燃え、科学の殿堂と、芸術の王座を持つ、一大教育楽園であるから、労働服を身につけた、過去聖、過去仏が雲集する。

曾て、日本民族は、伊勢参宮が、青年達にとって「男」になることであり、或は、洋行することが人間の資格審査であった。学者、芸術家は勿論実業家、技術家は勿論、金の有るという丈で男も女も、海を渡ったものである。人間の価値は、知識や、金を持つことではなく、社会秩序の信仰の有無で決る。価値は態度の対象である。人間の偉さはお辞儀一つでも分る。勝負は決る。国中の青年は、今や一年に一度、森都に、学都に参集して、自分の成長をはかり、テストする。世界の青年も、一生に一度は、新生日本を訪問したり、留学することになり、少くとも夢に見る。

新生日本は国民の大部分が中流の生活を営み、凡ゆる文明の恩恵を悉くの皆が普く享有する理想の社会であり、その中心は富士の樹海にある青年の大森都である。架線は地下に埋没され、電車は地下に発着する、全くの自然の都であり、そして最も力を女子教育に入れる。

終戦から30年後の日本、駅の切符切りや、柵は要らない。切符売りや、金網の戸は要らない、今迄でも、四国巡礼や小豆島に行って見よ。わらじも、食物も並べてあるが人間は居ない。況んや学園の試験監督は自主的監督である、出勤簿や出席簿は無用である。

30年後の世界は新生日本の文化に世界中襟を正す、この事実こそは30年前に敗戦の憂き目を見、上は天皇から下は橋の下の乞食にいたる迄、一人残らず、捕虜の生活、屈辱の日々を体験したお蔭である。負けた親子二代の隠忍自重の信仰深い生活から、祝福されてこの国土に生を受けたところの皇太孫時代の青年子女こそ新生日本の建設者なのである。彼等は先天的には、信仰深き両親の間に生を受け、後天的には、自然豊かな平和な環境に育ち、3才から3年間は宗教、音楽の雰囲気の中に、幼児時代を送り、6才以上は大体今日の学校に生産の農場や工場を附設した様な施設に通う。そして10年前までの日本の社会なり、教育の理想は、丁抹、瑞典、瑞西などの平和国家、民主教育であったのである。

教育大学では第一年は世界戦争の終った頃のLST位の汽船に乘せられて、友邦中国を訪ね楊子江を重慶を経て四川省の都成都迄遡る。

語学や科学は往復の船中で学習する。

第二学年は米国に渡る、主としてその科学を学ぶのである。

第三学年は欧洲に向う、英仏独の芸術を主として習う。

第四学年は教育の実習を主として、附属が半分、研究室、実験室が半分である。

曾て日本の海軍の士官達が世界の七ツの海を渡って雄大な大様な態度の人間が自然に出来上っていた。新しい教育も態度の教育である。明るい、平和な民主的な態度がどんな免許状よりも役に立つ。而も中国の古典に「詩あり、礼あり、学ある」とあるがこれこそ真の教育か。この新教育者には「親鸞は弟子一人も持たずさぶらう」「御同胞御同行」の哲学が身につき、攝取不捨の誓願に徹し、「若残一人、我不成仏」と、往古の使徒の生活の姿をほうふつさせる。言葉も挙措も飽く迄やさしいが、内には毅然として一步も譲らぬ気魄が充ちている。これ全く、全世界の人々を友とし、その芸術や科学、特に技術に親しく深く接して居るからであらう。

最後にこの展望が単なる夢、またはビジョンに終るか、正夢になるかは、吾々 8,000万日本民族の国家負担の覚悟次第である。覚悟は一切なり。忍以て之を貫く以外にはない。之を創造忍という。実行あるのみ。実行は最始最終の哲学なり。実行せざれば一切なし。且つ、一国の興亡は、国土の大小、人口の多寡にのみ限らないことは歴史の教えるところ、真に日本民族たるものゝ、国家負担の精神の強弱が日本国家の生死の鍵を握る。そしてこれは教育が単なる知識の教育である限りは望み得ない。覚悟の教育、態度の教育、真のライフセクターの教育に依って日本は救われる。誰れの手足まといにも、どここの国の世話にもならない、そして始めて日本が世界平和、人類の発展に貢献し得るのである。国民の真の独立、自治の教育は、純正の愛国、永遠の世界平和への道である。